

「公事宿事件書留帳 闇の掟」著者：澤田 ふじ子（さわだ ふじ子）

「公事宿」とは、訴訟や裁判のため地方から出てきた者を宿泊させた宿屋。訴状の作成と訴訟行為の代行、目安裏書（訴状の受理書）及び差紙（奉行所などからの召喚状）を訴訟人に送達する業務や、弁護人的機能、宿預（牢屋敷にて監視）、出火駆付（奉行所が火事るとき消火や運び出しを手伝う）など、公事宿の主人は、訴訟行為の補佐をすることを公認されていた。

また、研究資料を見ると、公事宿の関与したのは民事事件であって、刑事事件にはごく些細な、周縁的なことに関係したに過ぎないとしている。

公事宿と言えは、江戸の馬喰町であるが、本シリーズの舞台は、京都の二条城の南の御池通りから、姉小路、三条通りにかけて、南北にわたる大宮通りぞいに軒を連ねている公事宿である。

今回の読書案内の事件書留帳は、7話で構成されており、その第2話が「闇の掟」である。

ヒロインの田村菊太郎は、東町奉行所の同心組頭の父次右衛門が祇園の茶屋娘に産ませた子。4歳の時に引取られ妻政江の手で育てられ、文武両道で田村家の神童と言われていた。菊太郎には4歳下の実子の弟「鍊蔵」がいた。菊太郎は実子の弟「鍊蔵」に後を継がせるため、18歳になったある日から突如、遊蕩をはじめ、挙句のはてお金を持ち出し、屋敷から出ていったのである。

各地を放浪した数年後、京に戻り、東町奉行所に近い大宮通り姉小路上ルに店を構える公事宿の「鯉屋」に居候している。この公事宿の鯉屋に関わる難解な事件を菊太郎が糸口を見つけ真相に迫る話である。

【第1話：火札（火付の予告状）】

宇治の伊勢田屋の長吉の無実の罪（火付）を調べてもらうため、妹のお雪が身売りした30両を鯉屋に渡し、兄を助けてほしいとの依頼であった。事件の内容は長吉の父が20年前に茶商名倉屋の九兵衛に250両を貸したのを取り立てるため長吉が訴訟をしていたが、借金は父親に返したと言い、証文は破いておくといったが、残っていたのである。伊勢田屋の奉公人安三が支払済みと証言しており、返済した・していないの議論でらちがあかない中、長吉が名倉屋に火をつけたという内容である。

本事件は、与力組頭井上藤兵衛の吟味で、有罪となり長吉に死罪の沙汰を言い渡すのみ。二条城の牢屋敷には、与力の井上の指示により、だれも近づくことが許されない異常な状況であった。菊太郎は、事件の経緯に疑問を感じ、名倉屋と与力の井上が仕組んだものではないかと井上の周辺を調べていた。また、火札の筆跡が長吉のものではないことも調べ上げた。

菊太郎は、与力井上に本人秘密と事件の真相をにおわした結果、切腹し自害。その後九兵衛の悪事が露見、偽証した奉公人の安三は打ち首となった。長吉は無罪となったのである。

【第2話：闇の掟】

元山城藩で今は浪人の井上式部の公事の件である。阿弥陀堂筋の金貸しから、酒屋「菱屋」文蔵の息子孫次郎に百両の金を貸した証文の代筆を頼まれた。井上は偽りの証文を書いた詐欺容疑と、行方不明の孫次郎を殺害した嫌疑で捕らえられ、蔦屋の牢屋敷に入れられている。菊太郎は、人柄を観察し無実ではないかと疑った。

そんな時、公事宿の主人たちの旅の一行が襲われ、相模屋の総兵衛が襲われ殺害された。調べていくうちに、蔦屋太左衛門と間違っただけで殺されたのではないかと確証を得た。その後蔦屋の奉公人が襲われるなど、蔦屋で扱った公事に関して、何者かの恨みからの事件ではないかとあたりをつけた。公事宿内で起こった事件は公事宿内で始末をつけることが掟として守られていた。

蔦屋の扱った事件で、4年の島送りとなった善五郎が犯人ではと疑念をもち、見張りをつけその犯行を突き止め、踏み込んだところ、襲ってきたきたので闇の掟として切り殺した。

井上式部の無実が晴らされ、今は鯉屋の帳場で働いている。

【第4話：仇討ばなし】

二条牢屋敷に殺しの罪で閉じ込められている浪人森丘佐一郎は、美濃大垣藩戸田家の家中で、3年前の父の仇討の書状を持っていたが、藩に問い合わせたがその上役からは、そんな事実はないと無視されていた。森丘は同心に菊太郎に合わせてほしいと懇願した。森丘佐一郎は、菊太郎が放浪の旅で行倒れになっているところを森丘の父に助けられた恩人の息子であった。

菊太郎は、与力の立会のもと、事件の一切を聞いた。宿屋で殺害に使った刀をそのまま放置し、盗んだ5両もすぐわかるところにおいては不自然である。菊太郎は調べる猶予を、与力の伊波からもらった。

井上の父は、上役の野原重左衛門の不正をあばき、訴えるところを殺害され、その息子佐一郎の仇討が目障りとなり、落とし入れられたではないか。野原重左衛門宅に見張りをつけ調べていたところ、御用商人壺屋と結託し不正を働いていることが判明した。菊太郎の恩人の息子の森丘佐一郎の無実が明かされたのである。

【あとがき】

筆者は、世の中で一番恐ろしいのは、人間であるとしている。親鸞上人は人間について、「人間は無常な存在であり、激変する存在であり、執着する存在」と説いている。また、小説のヒロインは「恐ろしいものの中で最も恐ろしい人間は、ほとんどが最初、にこやかでさりげない顔で近づいてくる」とつぶやいている。事件の意外な結末は、こんな人間が起こした事件の裏側を暴いてゆくのである。